

## A L A K 派遣・招待講演を終えて

2006 年 11 月 14 日

広島国際大学 国際交流センター

峯石 緑

2006 年 10 月 26 日夕刻、ソウル・仁川国際空港到着ゲートに着くと、真っ先に、色とりどりのパステルカラーで書かれた「Dr. Midori Mineishi Welcome to Korea! Please go to the gate 7」と書かれた大きな掲示板が目に入った。そのままゲート7の方向に行く度に、同じ掲示板が掲げられている。楽しい予感に包まれて数分歩くうちに、ピックアップ・サービスの担当者が流暢な英語で話しかけてきた。外は目映い晴天。穏やかなソウルの秋。本年5月に同じソウルを休暇で訪れていただけに、今回栄えあるA L A K派遣・招待講演を行うために半年後に同地を訪れた感慨はひとしおである。

年次国際大会が開催される Korea University（高麗大学）まで、親切な若い男性ドライバーと時折会話を交わしながら、夕刻時の美しい漢川に魅了され、ソウルの見覚えのある街並みを懐かしくさえ感じていた。「責任ある仕事を全うする」という気負いが、次第に「落ち着いて実りある講演を行う」という気持ちに変わっていった。

Korea University 内のインターナショナル・ハウスに到着すると、若い女性が丁寧に挨拶をして自己紹介をした。到着後の私の面倒を全て見るよう彼女の指導教官から言われているとのことであった。ひとまず部屋に荷物を置き、設備説明を受け、私の食べたいものをご馳走するからとのこと、あまりスパイシーでない韓国家庭料理風をリクエストすると、繁華街まで楽しく歓談しながら歩き、ソウルでのその日初めての食事を取った。私はお礼にティールームでお茶をご馳走したが、その後これも指導教官からの指示であるとのこと、再びゲスト・ハウスの私の部屋まで送り届けてくれた。

翌朝、ラウンジで基調講演者 Dr. Nina Spada および Dr. Jan Hulstijn とお会いしたわけだが、そこで初めて私達招待講演者は同じフロアの全員隣同士にして頂いていることがわかった。また、A L A K が光栄にも世界に名だたる上記研究者の方々と同等に、私を plenary speaker としてホームページ上でも大会でも扱ってくださったことに感謝したい。最初の日には車を用意して頂き基調講演者全員で会場に向かったが、翌日はあまりに快適な晴天で、Dr. Jan Hulstijn が近いから徒歩で行こうとのことだったので、お喋りをしながら会場まで向かった。非常に陽気な Dr. Nina Spada が、「自然に囲まれたなんて素敵な大学なんでしょう！ねえ、ヤン、ミドリ。そうそう、ヤン、セッションの休憩時間に観光をなささい」と言われると、寡黙な Dr. Jan Hulstijn が「うん、そうするよ」といった具合に。

ただ、半年前からソウル行きをご家族で楽しみにされていた、また私自身かつて実験研究について教えて頂いていた Dr. Craig Choudron が大会直前に急逝されたことが痛ましく、特に親交が深かった Dr. Spada がステージ上で追悼の言葉を述べられた。

さて、大会初日の registration の前に、理事長、副理事長、理事、大会関係者および招待講演者だけで歓迎の昼食会が行われた。品格あるレストランで理事長挨拶、歓迎の言葉等頂いたが、終始非常にくつろいで話題の途切れぬホスピタリティ溢れる会食であった。韓国の大学英語教員は、その殆どが Ph. D. を保持し、しかもそれが英語圏、特にアメリカの著名大学から授与されたものであることも影響してか、大会の雰囲気全体が非常にアメリカナイズドされていた。メイン・ロビーにはふんだんなフルーツやスナックとドリンクを切らさず、誰もが基調講演者や発表者と気さくに意見交換できるように配慮しており、必ずコーヒー・ブレイクが 20 分あり、また自分のメール・チェックがすぐ出来るよう PC もメイン・ロビーにセットされているので、多忙な Dr. Spada などいつも頻繁に利用されていた。

今回 J A C E T リエゾンを担当して頂いた、西南女学院大学の山本廣基先生には、一面識もないにも拘らず様々なお励まし、ご支援を頂いたことは言うまでもないが、韓国側のリエゾン Dr. Youngkyu Kim も、欧米からの賓客だけでなく私にも準備・気配り・合間に自身の発表・会場設定と、いつもニコニコしながらまるでスポーツ選手のように飛び回る姿には感謝を超えて敬服した。

いよいよ大会が始まると、招待講演者は大講堂の最前列に座り、私は Dr. Spada のお隣の席であった。まず一人ずつ紹介されて立ち上がりスポットを浴びて拍手、会釈と言う形で進行し、私の講演は午後 3 時半から発表時間丁度に成功裏に終わった。モデレーターが記念に途中 3 枚も写真を撮ってくれ、「非常に入念に歳月をかけて計画された緻密なりサーチである」と、お褒めの言葉まで頂いた。その後、講演に感銘を受けたと言う院生が、手作りのピアスをプレゼントしてくれたことも嬉しい思い出である。彼女は、自分のメール・アドレスを書いて美しいブックマークも贈ってくれた。

各基調講演者の講演は通常一度に拝聴できない稀な機会としてありがたく拝聴したが、特に Dr. Hulstijn の「この 20 年間で S L A は進歩をしてきたのか」という講演は、入念に用意された 40 枚程のパワー・ポイントを使っただけの非常に感銘を受ける内容であったと同時に、自らの研究のあり方を考え直させられる程、彼自身の真摯な研究者としてのあり方をまざまざと感じさせるお話であった。

会食は朝食以外、都度都度上記のメンバーで特別室で行われるが、徐々に皆が打ち溶け合って、特に韓国側理事会の和気藹々とした雰囲気が、こちらまで楽しい気分させてくれた。そして各セッションも、まだ十分に英語が分からない英語教育に興味のあるオーディエンスを対象としたもの一つ以外は、全て流暢な英語で行われ、内容も極めてアカデミックなものから実践的なものまで、様々であ

った。セッションの合間の Dr. Spada の講演前のブレイクに Dr. Hulstijn に誘われ短い観光を院生付き添いでさせて頂いたのも心に深く残っている。5 月に訪れた場所ではあったが、紅葉が美しく、生涯でお会いすることなどないだろうと思っていた Dr. Hulstijn と院生と 3 人で過ごした短い美しく静かで不思議な時間であった。この観光に要した料金もこちらが固辞しても韓国側が全てまかなってくださった。

この大会が終わらなければよいのに、と思う頃に大会の終わりが近づいてきた。しかし終わり方が非常に楽しい。まずポスター・セッション入賞者 3 名が発表され、理事長自ら記念の賞状とアカデミックな洋書の賞品を渡し拍手。続いて参加者全員が引いていたくじの当選者が選ばれ、やはりアカデミックな洋書関連の賞品を次々にもらって大歓声と拍手。ボックスから当たりくじを取り出すのは我々招待講演者の仕事。私も何人かの参加者に記念品を贈呈した。さらに理事や大会関係者も加わってくじを取り出し、また大歓声と拍手。そして来年度世界大会の開催大学のアナウンスがあり、陽気な気分の中で大会は閉幕した。

引き続き招待講演者を囲む最後の会食が行われた。Dr. Youngkyu Kim が疲れを微塵も見せずニコニコして、「会食の後はみんなでカラオケだよ」と言ってきたので、大会の終わりの余韻を感じる暇もなかった。最後の会食もレストランの特別室で行われたが、招待講演者も理事長始め大会関係者も大会が大成功裏に終わったこともあってか終始和やかで陽気、私は色々な質問をあちこちからされ、誰から答えようか必死でいると「Dr. Mineishi が質問攻めで困っているよ、少し食べさせてあげなきゃ」と、理事の一人が助けてくれた。しかし韓国の人達は日本のことを非常に詳しく知っていることを改めて感じた。また、「ペ・ヨンジュンは何で韓国じゃなく他のアジアの国で売れるんだろう？」など理事の一人が突然言い出し、改めてソフト・パワーの影響を感じた。「カラオケに行きたい、歌いたい、でも明日の講演のため今から別のホテルに行かなきゃ、私疲れちゃったわ、みんな、バイバイ」と途中名残惜しそうに退席された Dr. Spada が非常にチャームングであった。

最後のカラオケでは理事長はハングルで、理事達は英語とハングル両方の曲を歌ったが、突然寡黙なジェントルマン Dr. Hulstijn が大声でものすごいダンスの振りを付けて踊り歌いだした時は、一瞬一同唖然とし、それが韓国の人に大うけでやがて一緒に踊ったりタンバリンをたたいたりし始めたのには驚いた。「日本の曲を歌ってくれ」とのリクエストに応え、私は This love song is very popular among young people in Japan. と前置きして中島美嘉の「雪の華」を歌った。ハングルで訳が出るので、リフレインを覚えてしまった理事達が日本語で合唱して、理事長から「また来年も是非歌ってください」と握手を求められた時は照れてしまった。

帰国日は Dr. Youngkyu Kim の配慮で朝食代・タクシーおよびリムジンバス料金をあらかじめ頂いていたので早めに空港に着き安心してチェック・インできた。

「パワー・ポイント資料をメール添付で送ってくればこちらで処理するから P C は持ってくる必要がない」と、親切にも 50 枚近いパワー・ポイント資料を送付後全てチェックし準備してくれていたことを含め、こちらで苦慮することがないようにここまで手厚く歓迎されたことに感謝したい。また、「あなたの発表が大変素晴らしかったので是非こちらの学会にも入ってください」と K A T E の理事からオファーがあったのも嬉しい限りである。

帰国後、理事長・副理事長・Dr. Youngkyu Kim、他理事数名にお礼メールを出したところ、全員からその日のうちに返事があった。みんな無事帰国とねぎらいの言葉以外に、理事長からは「必ずまた発表と歌を歌ってください」、副理事長からは「発表が大変興味深かった。来年も必ず来て下さい」、Dr. Youngkyu からは「落ち度があったら許してください」、そして、全員「これからも連絡し会いましょう。必ずまた会いましょう」と書いてくださっていた。当方、現在不在期間中の仕事に追われているが、落ち着き次第、必ず皆さんと頻りに連絡を取り、これを機会に今自分自身が新たな研究テーマとして構想を練っている「アジア極東を視座に置いた英語教育」について共同研究を行っていきたいと考えている。そしてここまで誠実に歓迎して下さった A L A K 研究者の方々にも、自身が実りある共同研究を行うことにより、ささやかながらお返しをしたいと望んでいる。

末筆になりましたが、このような得がたい機会を与えてくださった J A C E T の各先生方に、深くお礼申し上げます。